



出荷に向け、風車用などのベアリングを点検する日本精工の技術者たち＝6日、神奈川県藤沢市、関口聡撮影

エコ技術 買い手は海外



6

いてのイメージを紡ぎ出せないまま、足元で導入政策が弱く、飛躍を阻んでいる。

「2030年にどんなビジネスがはやってる？ 君たちが課長や部長になっているとして、自分の会社の商売をイメージしてほしい」

東京の青山学院大学。小島敏郎教授は約90人の学生に宿題を出した。

環境省の地球環境審議官を務めた小島さんは、将来の日本がどんな国になり、何で食べていくのか、気がかりでならない。新興国の経済発展はめざましく、生産量がピークを迎えて石油価格が高騰、温暖化問題もさらに深刻になりそう。これらリスクを乗り切るにはどうすればいいか、自分たちで想像力をはたらかせるしかない。

導入政策、弱い足元

ギードと世界の人たちは気づき始めた。風力発電はその大黒柱になりつつある。

神奈川県藤沢市の日本精工。発電用風車に使うベアリングの生産が伸びている。

主力は、世界3位のシェアをもつ増速機の部品。風車の羽根のゆっくりとした回転を高速にして発電機に伝える増速機は、多くのベアリングが組み合わされた「技術の固まり」。白井正俊・副工場長は「高所にある風車の機械は修理が難しい。20年間故障しない信頼性が求められる」と高い技術を誇る。

根を塔に連結する大きなベアリングで、日本メーカーのシェアは約6割を占める。

日本製ベアリングもほとんどが欧米、中国の風車メーカーへ輸出される。風車の世界市場は年5兆円とされるが、果実の多くは最終製品をつくる欧米のメーカーが取る。

三菱重工の上田悦紀・主席技師は「風車産業の成長にはパターンがある」と分析する。「母国の導入政策によって成長し、技術を磨く。母国市場の成長が鈍ると輸出を増やし、世界市場を獲得する」

太陽電池パネルも似た道をたどる。05年は世界生産の47%が日本だったが、08年は18%に落ちた。累積導入量も05年にドイツに、08年にはスペインに抜かれ3位。せつかく世界を圧倒するスタートを切ったのに、補助打ち切りなどで政府はブレーキをかけた。

「日本は高い技術を持ち、環境でリードしている」。多くの日本人は漠然とそう考えている。確かに技術はある。だが、2030年の世界や日本はどうあるべきか、この大きな問いへの答えを持たなければ、他国が描く夢に部品を納入し続けることになる。

ところが、肝心の日本の風力発電の累積導入量は世界13位。08年の世界の風車生産のシェアは、日本首位の三菱重工で2・9%。デンマーク、

太陽電池パネルも似た道をたどる。05年は世界生産の47%が日本だったが、08年は18%に落ちた。累積導入量も05年にドイツに、08年にはスペインに抜かれ3位。せつかく世界を圧倒するスタートを切ったのに、補助打ち切りなどで政府はブレーキをかけた。

編集委員・竹内敬二
桜井林太郎

3面に続く